論 文

新潟工科大学研究紀要　第23号

陳毅外相失踪問題と，２度の「尖閣諸島領有声明」の出処
～ 田中角栄首相の日中国交回復外交のもう一つの側面 ～

判 澤 純 太*

（平成３０年１０月３１日 提出）

The Missing of Foreign Minister Zhen Ke in Chinese Cultural Revolution and 2 Statements Issued by His Name

Junta HANZAWA*

On 14th December in 1970 and December 30th in 1971, Chinese government foreign ministry twice announced statements of her possessing Senkaku Islands each by using the name of foreign minister Zhen Ke . But , how he who had been sent in prison camp could be the releasers of that statements?

Key Words: Senkaku Islands, Kakuei Tanaka, Zhou En lai, Masayoshi Ohhira

はじめに ― 中共第８全大会以後の人民解放軍「唯武器主義」転換と鄧小平が率いる「６大書記局」支配の軋轢

１９７０年１２月１４日，中国政府は尖閣諸島（中国名釣魚島）が中国領に帰属すると突如公式に発表した．この事がその後日中間の重大な係争問題になるが，それにしても同声明発表のタイミングと，その真の発表責任者が一体誰であったのか（名義は文革中の陳毅外相だった）には，尚も大きな謎が隠されて残されたままにされている．その謎解きは，政治問題化している所謂「尖閣諸島問題」に関る交渉の本質解明に明らかに不可欠に考えられるので，本稿はその課題の探究を主に目的とする．

１９５６年秋に開かれた中共第８全大会で，総政治部副主任譚政が人民解放軍の近代化に関する報告を行った(1)．それをきっかけとして人民解放軍は技術装備の改善に着手し，加えて軍内における指揮，編成，訓練制度の面でも一連の改革を行った．溯る朝鮮戦争において義勇軍を名乗って参戦した人民解放軍は近代的軍事装備を所有する事の必要性をそこから痛感していた．１０の１級軍区と３つの直轄区に指揮機構が整備し直され，合せて「義務兵役制」と「階級制度」（５５年２月「軍官服務条令」施行）が導入された(2)．尚，「義務兵役制」を導入する狙いは，予備兵力を蓄えることにあった．

＊工学科（基礎教育・教養系）教授　国際関係論

Professor, Division of Fundamental Education and Liberal Arts, Department of Engineering

「階級制度」導入は，「将校団」とそれを統括する１０人の元帥を作り上げた．それが軍中に「唯武器思想」が蔓延する兆候を生み出したことは否めなかった．毛沢東の軍事思想が創造して来た「人」中心の軍隊は，「近代武器」中心の軍隊に切り変わっていった．「紅」が「専」によって次第に駆逐されていったのである．

彭徳懐元帥がこの唯武器主義傾向の中心的推進者になった．ちなみに６７年７月３１日『人民日報』は彭徳懐と羅瑞卿上将とを軍内最大の走資派と痛罵する(3)．彭徳懐は５６年にこう発言している．「我が軍が近代化の第一歩を踏み出すに当たって，『ソ同盟』（ソ連軍）のすべての進んだ経験を学び，これをすっかり自分のものにする姿勢が正しい姿勢である」．

一方建国時に４９年に６大書記局が設置され，それが中華人民共和国の行政機構を統治した．すなわち「東北局」，「華北局」，「華東局」，「中南局」，「西南局」，「西北局」の６つであった．「中南局」に注目すれば，同区は河南省，両湖省（湖北，湖南），広東省，広西省（僮族自治区を含む）を管轄地域とし，それは北京から出発して，武漢，長沙，広州を結ぶ中国大陸の輸送大動脈の便益地域（河北省を除く）を結ぶ粤（広州）漢（漢口）鉄道を押さえていた．

つまり「中南局」は中国産業の要の鉱脈を握った．そしてこれらの書記局を束ねていた者が鄧小平であった．「中南局」にはまた，陜西省，甘粛省に至るルートを独占管理するという側面もある．将来建設されるべき核兵力基地予定地（陜西，甘粛，西部内蒙古）をそれは地域的に囲い込んでいた．結論から先にいうと，鄧小平はこの重要地域の管理権力を絶対に手放す積もりがなかったし，そうしなかった．林彪が後からそれを入手しようとあれこれ画策したが失敗している．鄧小平は四川省を元々地盤とし，行政管轄機構を介して，成都，武漢（武昌，漢口，漢陽），重慶，南京らに列なる大都市群をほぼ掌握した．

東北から，ソ連軍の助けを借りる形で日中戦争の最終幕に間に合って戦場に乗込み，そこから南下した林彪将軍は，しかし国内に軍閥として地盤が無い致命的特徴があった．加えるに林彪は，それだったからこそではないか？と疑うが，朝鮮戦争に当面すると自前の部隊の兵力供出を渋り，言を左右に参戦を逃げ回って大いに顰蹙を買い，自分がそれ迄築いていた，祖国解放英雄として海南島まで一気通貫に猛然進軍させた赫赫たる軍神の評判を，ガタ落ちさせてしまった．

一方，「ジョンソン，マクナマラ，ラスク，ロストウ」ら米政府高官グループは６４年８月「トンキン湾事件」の発生を奇貨として翌６５年２月北爆に踏み切り，かつ派兵に関る白紙委任状を米議会から取り付けると，３月にベトナムへ地上戦闘部隊を送り込んだ．

５月，羅瑞卿論文は，満身を憤怒に染めたかにして「ドイツ・ファシストに対する勝利を記念し，米帝国主義と最後まで戦い抜こう」と吼えた．

１．党中央軍事委員会の「中央権力機関」化と，党９全大会への序章

１９５６年に第８全大会以来人民解放軍の代表的大軍区司令官の名前を挙げよと問えば，誰でも黄永勝上将（７１年９月総参謀長に昇格），陳錫連上将，許世友上将の３人の名前を挙げただろう．彼らメンバーの「党中央軍事委員会」が「中央権力機関」化したプロセスは，１９６０年１０月「中央軍事委員会」設立で鮮明化したが，たとえばこれは，「４つの第１」，「３・８作風」など「精神運動」が隆盛化する観察に基づいている． この種の精神運動は，人民解放軍内部で，政治部 ― 政治処 ― 政治指導員 の系列で展開されなければない特徴があった．かつ軍「政治部」は，新設された「政治学校」で常時再教育され直され，監視を受けながら指導力を評価され，コントロールを受けたのである．

ところで，人民解放軍指導層はそもそも，国民党軍の投降幹部がそれ迄主体をほぼ構成していた．その理由は，彼らのみが軍隊組織の高い指導能力を備えていて，かつ近代兵器の操縦能力も所有しているという，止むを得ざる軍の成立事情に由った．これらの既成勢力を排除し，林彪配下の勢力が人民解放軍の各処を代りに主体として完全支配する事が，前記の精神運動の狙いにあった．

６６年４月１８日付け『解放軍報』社説は，「党中央軍事委員会」が人民解放軍各「軍区」指令部を統括する変更を認めた[4]．

６８年１０月，江青，康生，謝富治（副総理）の３人が，― それは当然毛沢東，周恩来の差し金を受けてのことだったと容易に推察されるが ― 中央委員会第８期１２全大会で，悪辣無比で最大の「党の裏切り者」たる劉少奇国家主席（５９年４月第２代国家主席に任，国防委員会主席を兼任）を中国共産党から永久除名する，と決議した．

しかるに翌６９年４月党９全大会では，「毛主席の親密な戦友」の肩書きの林彪が，毛沢東の独自的改革である「３自１包」，「大躍進」政策の成果には一言も触れなかった．

この林彪の毛に対する無言の間接的だがあからさまな脅迫的態度は，林彪が強制「奪権」（それは禅譲形式でなく，ここぞと見れば林彪は直ちに「毛批判」を全面的に全国に繰り広げ，「大躍進」の宣伝が偽りであり，実情は大失敗であったと事実を暴露するであろう）の下心を抱いているまぎれもない証拠として，政治闘争に経験豊富な毛沢東には当然受け取れた．

６７年８月１日の「建軍節」に戻って，「大軍区」司令官の更迭について論及しておくことが重要である．この場で代表的な２人を探すと，成都の李井泉と蘭州の劉瀾涛が目玉で，両人は職務を取り除かれた．彼らは核基地の守護人たちであった．他に南京，河北，山西，青海，浙江，吉林，上海，安徽，湖南，甘粛，福建の司令官たちも更迭された．

それらの一連の人事の変化から憶測できることは，その後果して結果も適中したが，林彪系の革命委員会活動分子が，新たにそれらの軍区を占領するに至った．

他方６４年２月から，中・ソ国境画定交渉が開かれたが，双方とも譲歩する意思を微塵も見せず同交渉は行き詰まり，８月交渉で一旦打ち切られた．

２．鄧小平の党内序列の対林彪逆転優位確保と毛沢東の劉少奇への究極の敵視

１９６７年時点で毛沢東は，外国メディアに向け，「１９４５年から６５年への２０年間に，更に党（第８期）１１中全会を見て，私は劉少奇と鄧小平に対する最後の信任の一片も失った」と思いを漏らした．「総路線」，「大躍進」，「人民公社」という毛沢東の天才的な？社会主義的新政策（「３本の紅旗」）の創造が，いずれも実は惨めに大破産した結果を隠蔽しなければならないと，毛沢東は心中で苦悩していた．

劉少奇国家主席は，自分が信じる社会主義路線に忠実だったが，毛（党中央委）主席に対する「絶対忠誠」は誓わなかった．１９６４年１２月の第３期全人代から毛夫人の江青が，政治指導の第一線にしゃしゃり出て来た．

毛沢東は１９５８年１２月の中共党第８期６全大会で，自分は第２期国家主席選に再出馬せず，政務の第一線を退くと表明していた．その毛に代って，５９年８月８中全会から第一線指導者に認められた人物こそ劉少奇国家主席であった．鄧小平は劉少奇を補佐した．そうなってみると誰もが本格的な近々の「劉少奇時代」の幕開けを信じた．

ところで，党中央政治局常務委員会で，それ以前に，外面上ではささやかに序列代えが事前に起こっていた．林彪も鄧小平も，５５年４月第７期５中全会で初めて政治局員に選出されていた．８全大会体制下に，林彪は党序列第６位から７位に降格した．一方鄧小平は逆に，第７位から第６位に昇格した．林彪副総理と，片や中央書記処を握っている鄧小平は，６９年４月党第９期１中全会まで，行政的主導権争いを戦っていった．つまり「有事の行政」を上位に置くか？又は「平時の行政」を優位に置くか？という政治的制覇戦の進行であった．

７３年８月３０日，林彪は党１０全大会で公式に失脚する．その時中央委員会主席が毛沢東である．同大会で，他に解任された林彪派軍人主要人物は，黄永勝総参謀長，呉邦憲副総参謀長兼空軍司令官，李作鵬海軍中将，邱会作副総参謀長兼後勤（人事）部長であった．これらの４人の軍幹部が，７１年の所謂「９・１３事件」（林彪によるクー・デター未遂事件）まで，林彪，葉群（林彪夫人）と共に中国政治・軍事の実権を握った．

３．１９７０年に解放軍の「実権」を握る「軍事委員会弁事組」

１９６８年１１月中共党第８期１２中全会で林彪は中央委員会副主席に再選されたが，それ以前も，本来中国共産党の最高頭脳機関であるべき中央政治局常務委員会が脳死も同然状態になっていたと指摘できる．その構成員は周恩来，陳伯達，康生の３人だったが，陳と康は２人共で周恩来に「反革命」の汚名帽子を被せ，周の政治生命ばかりか命すら狙って暗躍していたから，政治懸案への意思決定機関としての業務が営まれるどころの話ではなかった．７０年８月～９月第９期２中全会で，陳伯達は毛沢東から弾劾を受けた．

６８年４月以降「軍事委員会常務委員会」は機能をまったく失い，現実上その会議は２度と開かれず，その職務は「軍事委員会弁事組」に強奪された[5]．この新しい組織を，林彪副総理が率いた．「軍事委員会弁事組」が人民解放軍の全組織を正式機構として統括統制する事になった．黄永勝（６９年４月第９期１全大会中央委員）がその組長になり，呉邦憲が副組長であった．２人はいうまでもなく林彪の最側近である．

他のメンバー８人は，葉群，劉賢権（少将），李天佑（上将），李作鵬（中将），李徳生（少将），邱会作（中将），温玉成（中将，副総参謀長兼北京衛戍区司令官，６９年４月成都軍区副司令官に転任），謝富治（上将，副総理）であった．６９年４月２８日以後，林彪，葉群，黄，呉，李（作鵬），邱の６人が「形式的」にも中国全軍を握ったといえる．

６９年９月２４日に中国が満を持して実施した核実験は，４月の「林彪劇場」，つまり「９全大会」の行方を，華々しく盛り上げる舞台装置に使用する意図がアリアリと窺えた様であった．

他方，１０月に流れ出た北京での「中ソ国境交渉」ニュースは，中国が対ソ開戦の瀬戸際に立っている窮状も市民たちに必死に訴えた．つまり林彪がいなければ中国国家存亡の危機を救えないかの雰囲気が社会に盛んに醸し出された．

なお，もう少しその周囲に目を廻らせると，１１月劉少奇国家主席が河南省開封の寒村の獄舎で，「反革命」の汚名の帽子を被せられた無名の罪人として，哀れに獄死をした．しかし，後には８０年２月，劉少奇は中共第１１期５中全会において名誉を回復され，積年の恥を遂に雪いだ．

６９年１２月，北京軍管区司令官鄭維山（中将）が内蒙古軍政も兼務する人事が公に明かされた．また，先の９月２４日核実験成功の余勢を駆った形で，１２月２２日，「軍事委員会弁事組」は「国防工業指導小組」を下部組織に創建し，「有事」（今現在が有事である）に中国の全産業を統制下に収める絶対権限を得たのであった．

ちなみに，この「軍事委員会弁事組」こそ，６９年４月４日北京で中日覚え書き貿易事務所代表と日本の日中覚え書き貿易事務所代表間に始まった交渉での，中国側機関の母胎になったのである．

７０年に毛沢東が，一方で「中央組織宣伝組」（康生組長）を組織させたのは，中央の人事を林彪に独占的に握らせないバランス的配慮を行使したのであったと忖度することが出来る．同組織の組員は，江青，張春橋，姚文元，紀登奎，李徳生であった．

ところが，林彪の７１年「９・１３クー・デター事件」後に，１０月３日，この「軍事委員会弁事組」は解体され「軍事委員会弁公会議」に代った．後者の機関は，６６年８月に鄧小平を名指しで批判した謝富治（副総理）公安相と，「４人組」の代表である張春橋を，やむをえず成員に抱き込んでいた．「軍事委員会弁公会議」は，葉剣英（元帥），謝富治，張春橋，李先念（副総理兼財政部長），李徳生（少将），紀登奎，汪東興，陳士渠，張才千，劉賢権（蘭州軍区・青海軍区司令官）らの１０人がメンバーであった．ちなみに，謝富治は，７２年３月２６日死去した．１９８０年１０月１６日，中央規律検査委員会は，

謝富治を「林彪・江青グループ」のカテゴリーにひっくるめると見なして，その党籍を剥奪した．

７５年２月に，「軍事委員会常務委員会」が再度組織化された．一見して分かるが，そこには人民解放軍の上級幹部がずらりと網羅されていた．そのメンバーは，葉剣英（元帥），鄧小平，劉伯承（元帥），陳錫連（上将），汪東興（６５年１１月に罷免された楊尚昆の代りに選出），蘇振華（上将），徐向前（元帥，全人代常務委副委員長），聶荣臻（元帥，副総理），栗裕（上将）らであった．

４．羅瑞卿失脚をめぐる林彪「クー・デター」の予兆

（１）陳伯達の失脚

１９７０年８月～９月の中共党第９期２中全会（芦山会議）で閉会式に周恩来が発動した陳毅批判は，毛沢東の「両陳（陳伯達・陳毅）批判」の受け売りに等しかった．毛は，両陳の罪業は劉少奇・鄧小平にも十分に匹敵すると批判した．

ところが毛沢東はその腹の内では，同時に次には林彪攻撃を準備していた．毛沢東はその手始めに，次なる「路線闘争」喚起に用いる積もりで，周恩来，康生，李徳生ら３人に（他に康生，姚文元も活動部隊として入れる）林彪の行動のあら探しをするように命じた．その活動のグループ名を「中央組織宣伝組」と名付ける．

「芦山会議」から林彪の側も，「毛沢東は俺を決して許さないだろう」と憶測して，覚悟を固めなければならなくなっていた．黄永勝も呉邦憲もが毛の恐怖を同様に感じた．呉は恐怖の余り，自殺未遂を幾度か起こしている．

上記の「芦山会議」で，党序列が毛沢東，林彪，周恩来に次ぎ No. ４に駆け上った自称天才文人陳伯達・政治局常務委員が，林彪の代理を務める「毛沢東天才論」ブチ上げ演説を得意そうに披露した．だがあろうことか周恩来首相は，９月６日閉会式で，陳伯達に「査問」を行うと発表した．逆襲の開始であった．陳伯達を奈落の底へ忽ち突き落とした．

林彪講話は張春橋の失脚を直接狙っていたが，しかし黒幕として林が心中狙いを付けている相手が江青であることを，毛ならば見抜いた．周恩来も毛の判断を追認したであろう．

林彪は自分を救う唯一の方法を模索した．それは，息子の林立果が自由に独自で操作できる空軍「調査研究小組」（山本五十六の映画に感激した立果が「連合艦隊」と改名した）によって北京軍事クー・デターを決行させるか？あるいは広東へ逃亡してその地から毛に対して無益な軍事対決を試みてみるか？またあるいは，妻の葉群がしきりにそれを勧めるのだがソ連亡命か？究極の３択に絞り込んだ．林彪に接近した陳伯達は，同芦山会議を利用して，朱徳，陳毅外相，李富春，董必武，葉剣英ら５人を失脚させようと自分なりに足掻きはしていたが，陳の野望は踏み砕かれた．

陳伯達の不様な失脚を見ても，しかし林彪派 No. １の黄永勝人民解放軍総参謀長が９月に，北京に開学した「軍政大学」校長に就任した事は，「軍事委員会弁事組」が人民解放

軍の全成員の「人事」を握ったに等しい．林彪とその妻の葉群は，呉邦憲中将（林彪派 No. 2）をその拠点地から暗躍させた．

彼等がいよいよ真の打倒標的にした「江青グループ」を陥れる前に，林彪と葉群は，先に偽証拠をでっち上げて羅瑞卿上将を追い落としかけたから味をしめていた．

ところが，毛沢東が途中から羅瑞卿救済に転じたから，林・葉の当てが外れた．毛沢東と林彪派の溝は，７１年「９・１３」事件の前に修復出来なくなった．一方呉邦憲（空軍副政治委員）は７０年７月６日，首都北京の「空」を支配する全権を林立果に与えた．

他方，一般の目に付き難い所での作業ではあったが，国務院が調整簡素化の名目で改組され，９０部局が大幅に削減され２７部局に減った．しかも残ったその２７部局の内，７部局が「軍事委員会弁事組」の直属機関であった．したがって，周恩来の国務院に残されたのは，１９部局と中国科学院になった．この改組に反対する国務院スタッフは，「５・７幹部学校」に送り込まれた．そこでは労働矯正，洗脳矯正措置が課された．

（２）羅瑞卿上将の失脚

戻って，１９６５年１１月３０日，林彪は葉群を，その時たまたま杭州に滞在中の毛沢東の膝元にわざわざ派遣し，羅瑞卿（上将）・副総理に中央権力簒奪の野心が窺われると葉から誣告させた．なおこの時点で，人民解放軍内で「割拠地盤に根を張る」３大実力者と謳われていた者は，彭真北京市長の周囲にいる羅瑞卿，李雪峰，陳錫連の３人であった．

６５年１２月８日～１５日在上海党中央常務委員会拡大会議宛てに，林彪元帥が葉群から「羅瑞卿摘発資料」を届けさせた．その偽資料を直接作成した者は，雷英夫少将と張秀川海軍少将であった．その偽資料の存在は，林彪と羅瑞卿間に人民解放軍の主導権をめぐって熾烈な争いが伏在している背景を窺わせた．上海で林派の雷少将は，羅瑞卿に対する「欠席裁判」を行った．

６５年５月，羅瑞卿は中央書記処書記（鄧小平の直属）職を失った．そして次には，翌６６年８月から，今度は劉少奇国家主席を陥れる資料の捏造が着手された．

６８年１０月，党第８期１０全大会において江青，康生（秘密警察トップ），謝富治副総理（公安相）の３人は，劉少奇を獄中に監禁して拷問し劉少奇に供述させた，と称する偽証拠資料を提出して，劉少奇国家主席の永久追放を決議させた．

１２中全会で，公安部（警察）と中央特捜部（第３弁公室）を牛耳る謝富治副総理は，劉少奇と鄧小平の２人を共に大衆の面前に引きずり出して，「人民裁判」にかけるべきだ，と声高に主張した．後に，７２年３月，謝の葬儀に際して，江青がその葬儀を主催したが，江青は全土に半旗を掲げさせ，謝を国家元首級として扱って葬儀を営んだ．

毛沢東自身は，１９７３年に，「林彪の羅瑞卿に対する政治闘争は何から何まで誤っていた」と，遅まきに自己反省を口に出した．羅瑞卿は中共第１１期中央委員に返り咲いた．

（３）彭真・北京市長，李雪峰・華北局第１書記の失脚とその周辺

１９６６年５月彭真北京市長が解職された後，（鄭維山のショート・リリーフを挟むが）北京市党委第１書記に任じられたのが李雪峰（６９年第９期１中全会政治局常務委員）であった．李雪峰は第３期全人代で，常務副委員長に昇格した．内蒙古自治区の華北中央局への移管に伴い，李は続いて，中央政治局候補委員の烏蘭夫（ウランフ）を下位者に従えたので有名人になった．李雪峰，鄭維山（中将）は，７１年４月「９９人会議」による指弾を受け，５月以降に公のメディアから消息を絶った．

「９・１３林彪クー・デタ未遂事件」の後に，鄭維山は隔離審査に処された．「四人組」が失脚した後，中共第１１期３中全会後に，鄭維山は再審査を経て蘭州軍区司令官に転出した．

王恩茂中将（新疆ウイグル自治区革命委主任・同軍区司令官），曾雍雅少将（チベット自治区革命委主任・同軍区司令官），潘復生（黒龍江省党委第１書記），李再含（貴州省革命委主任），藍亦農（貴州省軍区第１政治委員兼昆明軍区副政治委員），王維国（上海市革命委副主任兼空軍上海指揮所政治委員）らも，６９年５月以降７１年９月までに消息が千々に入り乱れて報じられたが，五月雨式に公のメディアから次々と消息が消えた．

１９７１年前半に全国各省級党委書記１５８名の内９９名（５９・５％）が軍幹部によって占められた．その内第１書記は２２名が軍幹部であった．（林彪派の陰謀による）入れ替え人事が起こった趨勢と推察出来る．毛沢東は，この間，７１年８月中旬～９月１２日まで，「地方（武昌，長沙，杭州）巡視」を称して姿をくらましていた[6]．

「３反５反」運動では自らが大殺戮者の顔を見せた彭真北京市長だが，ところが御都合主義の「彭徳懐元帥叩き」の世の風潮には頑固一徹に阿らず，江青ら「四人組グループ」の専横ぶりに一貫して大いに批判的であった．しかしそれが結局彭真市長が咎められた究極の理由に尽きると推測される．

彭徳懐元帥は，湖南湘潭県以来の毛沢東との「竹馬の友」の絆や，朝鮮戦争での自分の抜きんでた勲功を過信し過ぎたかも知れなかった．彭は毛にしばしば直言し，５９年に「大躍進」政策の失敗を素直に認めた方が中国人民の利益に適うのだよと，直接手紙を送達して猛省を促したが，却って毛の憎しみを買った様だった．なにより彭は人民解放軍の「機械化」を，党中央（毛沢東を指す）の絶対権限維持を凌ぐレベルへ掌握し過ぎた．

彭元帥は文革の最中に，「右派日和見主義反党集団頭目」という烙印を押されて，虐待を受けて死亡したが，７８年に名誉回復した．

林彪は自分の部隊を朝鮮へ派兵することを嫌がり温存して頗る評判を落したのだが（先述），片や彭徳懐に対する世間の賛美の方が鰻上りに上がったから，林は彭徳懐に対する妬みをいっそう募らせた．

彭真市長はインテリ臭がかなり強烈に臭って，それは彼なりの矜持からであったともいえたが，しかし，それが彭真の命取りになった．毛沢東は，「北京軍区と華北の太上皇に成り上がった積もりか！」と怒って彭真市長を処分した．

李雪峰の軍重鎮としての存在感に，いかんせん林彪といえども処置に手を焼いた．しかし，１９７０年８月，李雪峰・華北局第１書記（北京軍区第１政治委員）は，中共第９期２中全会で失脚した．１９７３年８月，李雪峰は党籍除名処分に処され，拘禁され農場へ労働改造に送られたが，ところがあろうことか，今から検証すると馬鹿げているがその李雪峰の罪名は，「黄永勝・呉邦憲グループ」の主犯格にされていた．しかし８２年４月１日に，李雪峰は党籍を回復した．

西南局と四川省の責任者に「成都の李井泉」がいたが，劉結挺・四川省革命委副主任，梁興初・四川省成都軍区司令官兼党委第２書記らが，６７年８月１日「建軍節」に「文革急進派」を名乗り李井泉へ牙を剥いた．李井泉は６７年４月，四川省に独立王国を築いていた容疑で林彪派に弾劾され，失脚した．この状況を見ればほとんど誰もが，次には毛沢東は，目障りな彭真北京市長を必ず狙い撃ちするだろうと予想することが出来た．

一見絶対権力者に見えた毛沢東でも，首都の実務行政だけは思うどうりに動かせない．彭真の本音を忖度すれば，彭真・北京市長から李雪峰に後ろ盾を頼んだならば，毛沢東にでさえ十分に対抗できると考えただろう．だからこそ，首都圏行政を握っている「彭真 － 李雪峰 － 陳錫連」枢軸を破壊するためには，毛沢東は，林彪が所有する人民解放軍の武力を欲しがったし，毛は林彪ともあえて手を組んだのだと，「文革」の根底にあった政治構造を分析しても妥当であろう．

「彭，羅（瑞卿），陸（定一）」と一括りにされた形で，楊尚昆は６６年７月に逮捕された．楊は７８年まで拘禁されていた．楊はかつて１９３５年の「遵義会議」の決定的場面で毛沢東支持を決断し，毛の主席，（延安以来）共産党単独支配への輝く道を拓いた１人である．だがその後，楊には鄧小平擁護の姿勢が際立っていた．

楊尚昆の罷免後，中央弁公庁主任に任じたのが汪東興であった．汪東興は党中央特捜班責任者として，劉少奇国家主席狙撃劇に関る主役の一人を演じた．

「９・１３林彪クー・デター」に，李徳生・南京軍区副司令官は（北京）空軍司令部を接収した．その功績を買われて李少将は，毛の覚えがみるみる急に目出度くなった．毛沢東は李徳生を，６９年４月党９全大会にわざわざ招致した．目を奪うスピード出世を遂げて，７０年，李は人民解放軍総政治部主任のポストを手に入れた．７３年「８大軍区司令官総入れ替え」制（周恩来は新疆に楊勇上将を派遣）で，李は沈陽軍区司令官に転じた．

だが，その李もやがて，先達たる李井泉の例に倣ってなのか？７３年に，李徳生は，党副主席兼政治局常務委員でありながら沈陽軍区を独立王国レベルに統治する，野心的で毛にとって最も危険な一人の大物軍人の姿に変貌した．

（４）賀竜と葉剣英，両元帥の失脚と雌伏

李作鵬中将は海軍の内部に，張秀川少将らと一緒に分派である「戦闘集団」を結成した．その上羅瑞卿上将と賀竜，葉剣英の両元帥も合せた３人を罠に陥れようと謀った．この黒い策謀を察知したからこそ，周恩来首相は，「周，黄（永勝），呉（邦憲），李（作鵬）」

の「４者合意」がなければ人民解放軍は勝手に動員してはならない，と苦肉の策を事前に公に宣言していたのだった．

黄永勝上将は，６８年以降人民解放軍総参謀総長に任じていた．「軍事委員会弁事組」組長として，黄上将は，「陳毅外相（軍事委員会副主席）には，今後重要な電文であっても届ける必要は一切ない」と決断した．

しかし黄永勝上将は，７３年８月２０日に党から永久除名処分を下された．８１年１月２５日黄に懲役１８年判決が下され，政治権利剥奪５年が定まった．黄は８３年に７３才で病没した．

賀竜（元帥）国務院副総理は，中央軍事委員会副主席の重要指導工作を遂行していた．賀竜は６９年６月９日死亡．７４年９月名誉回復．凄まじい政治糾弾を紅衛兵たちから浴びて賀竜は思い余った挙げ句，（北京）西花庁にあった周恩来の自宅へ保護を求めて転がり込んだ．その賀竜を，ところが周恩来首相は北京郊外に幽閉させた．

６７年９月１３日，林彪が仕組んだ謂れ無き誣告を採用した上，賀竜の「反革命容疑」立件を許可した責任者は，誰あろう周恩来総理その人であった．しかも，周は葉群の求めに応じて，捏造する偽造証拠に自分も一筆書き加えている．

葉剣英元帥は，中央軍事委副主席兼軍事委秘書長を務め，６６年８月党第８期１１中全会，第９期１中全会で政治局副主席であった（主席は毛沢東）．林彪元帥（６９年４月２８日第９期１全大会に中央委員会副主席として再選）にとって，この賀，葉の古参２軍人が身に纏っている絶大なカリスマ性が，人民解放軍を自らの権益拡大へ変革しようと謀る上では一大障害であった．

賀竜は共産党の蜂起歴史の起源である２７年「南昌蜂起」に，周恩来を補佐して参加した伝説上の人物である．葉剣英も，同年に南方で，張太雷，葉挺と共に「広州起義」に参加し，２人の存在は草創期の中国共産党史そのものであった．賀竜は６９年６月９日文革中迫害を受けたせいで死亡した．

５．文革進行中の陳毅外相の失踪事件

６９年４月時点（中共第９全大会）にも，そして７１年初の時点にも，国務院は，総理ポストが周恩来であり，副総理が，①林彪（筆頭副総理），②李富春，③李先念，④聶荣臻，⑤謝富治，⑥陳雲，⑦陳毅の７人であった．しかし，建国以来外相の陳毅は，当時は職務を担当できる状況にいなかった事実を検証したい．

国防部長は林彪であった．「国務院・外交部」と「国務院・国防部」の間で「食うか食われるか」の職権争いを展開していた．林彪を除いた残り６人の副総理の内，まず②李富春と，③李先念は，６７年２月１１日の「懐仁堂騒動」で「２月逆流」のレッテルを貼られて文革派から迫害された．

次に④聶荣臻は，６７年１月１９日「京西賓館事件」で因縁をつけられて，林彪の敵に分類されていた．⑤謝富治は，５５年に上将昇格．中共第８期中央委員として「林彪・江青グループ」に接近し，６６年第８期１１，１２中全会で，劉少奇，鄧小平，陶鋳，朱徳，陳毅，李富春，董必武，葉剣英らを，「毛沢東に弓を引き，外国勢力と内通している，武装クー・デター陰謀の画策者たちである」と誣告した．謝は死後に，中央規律検査委の審査を受けて，党から除名処分になった．

⑥コミンテルン駐在代表団出身の理論派として党序列No.４・陳雲は，６８年中共第８期１２中全会で「林彪・江青グループ」から集中包囲攻撃を浴びた．後に７８年末，党第１１期３中全会で政治局常務委員・党中央副主席として陳雲は復活した．

⑦の陳毅に関して，いよいよこれから以下に述べよう．

さて，前８全大会から４年４ヶ月ぶりに久々に開かれた党第９全大会（主席毛沢東，副主席林彪）は，簡単に言って「軍人一色大会」に姿を一変させた．同大会は党・政幹部が９５人から６３人に減り，軍人は４２人から７８人に増えた．ちなみに中央「候補」委員数を見れば，軍人の増殖ぶりがもっとも顕著であった．党・政幹部のそれは，前８全大会では１２４人だったのが８６人に，軍人のそれは６６人から１１９人に増殖していた．

６９年４月～７１年初の時期の片や国務院と他方共産党の「党機構」の間の力関係を考慮に入れてみると，１９７０年１２月４日に中国共産党政府は尖閣諸島に関する第１次「中国領有声明」を初めて内外に公に発したが，その声明が，極めて特異な政治状況下で発表されていた事実が判明する．同声明は，建国後一貫してその職にあった陳毅外相（外交部長）の名前で対外的に発表されていたが，陳毅の名前を騙っていたことが歴史的に明らかになろう．

陳毅外交部長（外相）は，外相職など到底務められない場所に所在していた．尚，その当時周恩来首相は，「江青グループ」の黒幕である康生（７０年１１月中央組織宣伝組組長に任，７３年８月第１０期１中全会で中央副主席に任）に命を付け狙われていた．７５年１２月に康生は病没した．８０年１０月康生は党から除名処分．

陳毅（１９０１年生）元帥は若い頃「勤工倹学」運動でフランス留学を体験した．帰国後，新４軍軍長代理を経て，華東野戦軍司令官兼政治委員，第３野戦軍司令官兼政治委員に任じた．中華人民共和国建国後（中国では「解放後」とも称する）に，陳毅は華東軍区司令官兼上海市市長，国務院副総理兼外交部長に任じた．また軍事委員会副主席を務めた．

陳毅外相は，６６年１１月，中央文革小組を２度にわたって批判した罪で所謂「２月逆流」の首謀者の一人に認定された．毛沢東も陳毅に対して，「陳毅は『延安整風』すら誤っていたと主張しているのか？」と激怒したといわれている．

６８年，「林彪・江青グループ」は結託して，陳毅外相が「第２の劉少奇・鄧小平ブルジョア司令部である」と批判を加えた．陳毅は，党第８期１１中全会で批判の集中砲火を身に浴びた．ところが，なぜかそんな陳毅にも毛沢東は一分の情けを独特にかけ中共第９全大会へ出席することだけは許可した．こうして６９年４月，だからこそ陳毅は，その哀

れなドン底に墜ちた姿を，同党第９期中央委員会の場に最後に晒した．

６９年４月，第９全大会前後に，陳毅は外相でいながら，北京の光華木材工場で「蹲点労働」を課せられた．「蹲点労働」とは，処罰対象の党幹部用に労働改造による更生支援を名目とする強制労働罰のことを意味するのである．

６９年１０月，林彪は，あたかも自分が党中央であるかに装い強烈に世に存在を誇示した「第１号命令」を発布し，ソ連との全面対決の予想を勇ましく語った．毛沢東に代って，林彪こそ今朝の「有事の宰相」に相応しい，とメディアに林彪がこれでもかと登場を繰り返して自己アピールした．同時期に，陳毅は北京から石家荘の製薬工場に身柄を移送されていた．

１９７０年末，陳毅は癌を患い北京に連れ戻された．解放軍病院で入院治療が陳毅に施された．１９７２年１月６日陳毅は北京で死去した．

１月８日，陳毅の葬儀にカンボジアのシアヌーク夫妻（北京亡命中）や宋慶齢（孫文夫人）国家主席も招き，自らもサプライズ出席した毛沢東は，そこで亡骸に別れを告げようと寒風を突いて詰め掛けた解放軍老幹部たちの数のあまりの多さを見るとさすがにうろたえた．毛沢東は，自分が読み上げる手筈の弔辞中に書いていた，陳毅の人生は「有功有過」であった（功績も過ちもあった）という非難的文句をその場で削って，「陳毅同志はまことに立派な人物であったし，中国革命に貢献した人物でありました」と，陳毅未亡人の張茜を慰める言葉を即興で読み上げた．

８月１４日，毛沢東は，鄧小平が毛宛てに差し出した手紙に，「劉少奇と鄧小平とは区別して扱うべきだ」と批示した．これは，鄧小平は今後，打倒対象から外してやれという，毛の指令に匹敵する．

前７１年１月４日～１０日の中国共産党上海市第４回代表大会で，張春橋が市委員会第１書記に当選した．他方７２年８月１日に，陳雲，王震（上将，国務院副総理，解放軍副総参謀長，６８年～７２年江西省紅星開拓場に下放され，肉体労働に従事していた）の２人が自由の身になったが，すると２人は１５日に軍事科学院から，「林彪のブルジョア軍事路線を批判する若干の問題」（資料その１，２）なる出版物を編纂発行した．

７２年９月２５日，田中角栄・日本国首相が，大平外相と共に「中国訪問」の目的で北京空港に到着した．

６．林彪副総理のクー・デター失敗とそれから以後

（１）林彪機の墜落

７１年９月１３日から３日間中国国内の主要空港が突然すべて閉鎖され，外国メディアの度肝を抜いた．すると同３０日になると，モンゴル国モンツォメ通信が不意に，９月１３日にモンゴル国上空で中国機（トライデント２５６）が墜落した事故があった模様だと報じた．中国政府は，１０月１日に迎えた第２２回国慶節で，恒例であった軍事パレード

を今年に限って中止すると発表した．また，これも例年恒例であった慶祝３紙合同社説も，発表が無かった．

「９月１３日に林彪がクー・デターに失敗してソ連へ亡命を謀ったが，モンゴル国の上空で墜落した」とする発表が中国政府からあったのは，それから時をやや経た７２年７月の毛沢東による談話の配信の形であった．加えて，中共党第１０全大会（７３年８月２４日～２８日）において「周恩来報告」が，「林彪事件」に関する政府公式見解を発表した．

（２）王洪文の台頭

７２年に，７５才の葉剣英老元帥は周恩来首相に随伴してニクソン，キッシンジャーを出迎える姿を北京空港に現した．しかしその４年後に，よもやその葉元帥が誰をも驚かせる政治激変の仕掛け人に近々なろうとは，その時は誰にも想像出来なかった．

７３年，鄧小平が国務院副総理に復帰した．８月３０日，王洪文なる若者の１労働者（上海市革命委副主任）が，中共第１０期１中全会の会場に新型英雄を装って姿を表した．その一方第１０全大会までに省級党委員会の大再編が各地で大規模に行われていた．その他，（１）共産主義青年団，（２）総工会（労働組合），（３）婦女連合会等の組織についても，「四人組」の意向に沿い改組再編されていた．

その第１０期１中全会で，他方では，葉剣英・前人民解放軍参謀長が党中央副主席（「軍事委員会」副主席でもある）に就任したが，「四人組」は特段注目警戒しなかった．６７年北京「京賓館事件」以来葉剣英元帥が蕭華（解放軍総政治主任）を庇い，江青の仇敵に名乗りを上げるがそれでも，美貌が自分より明らかに格段に上回っている王光美（劉少奇夫人）を秦城監獄に収監するという個人的復讐行為に専ら関心と精力を集中させていた江青は，つい油断してしまい，毛・周以外で唯一の政治局常務委員のポストに当時いる，腹心の康生（６６年中央文革小組顧問，７３年８月第１０期１中全会で中央副主席に任じたが，７０年８月「芦山会議」以来病床にあった）のみに葉老人の監視を任せきりにした．

７６年９月，毛沢東は，油断ならない周恩来が１月８日にやっと膀胱癌死したのを見届けられたので，同じ北京の空の下で８３才で，いまこそ安らかな気持ちで老衰死した．すると，翌１０月６日，葉剣英元帥はすぐさま江青の住処を急襲し，何が起こったのか理解できずに呆気に取られたままでいた江青を逮捕した．約１０年間以上中国全土を被ってきた，世紀の騒乱状態としての希代の「文革」は，こうしてあっけなくここに終焉する．

７．第１次北京外交部声明

１９６９年１月ニクソン米大統領就任演説は，中国との関係改善（国交回復）を求める米国政府の新外交方針をそれとなしに臭わせていた．５月と８月に中・ソが，黒龍江省北境と新疆で激しく衝突した．中国軍は１００万人が極東に駐留するソ連軍に対して，全軍に臨戦態勢を発動した．８月，ニクソンは「国家安全保障会議」で，共産中国がソ連に滅

ぼされるよりも，生き延びさせる方が米国の国益に適っている，と発言した．

６９年１１月，三島由紀夫が自衛隊市ヶ谷東部方面総監部で割腹自決を遂げた印象的事件があったが，それはともかくとしてその翌７０年の１２月に，周恩来がパキスタン大使を擬装に使いながら，イスラマバードからキッシンジャー宛てに１通の手紙を送った．その中で周は，中国政府はアメリカ軍のカンボジア爆撃に抗議し，現在米駐ワルシャワ大使の米中対話ルートが塞がっているが，ベトナム戦争が米中和解の障害にならない，と画期的見解を述べた．６月２日，ニクソン米大統領が中国政府からの来華招請に応じると申し出ると，周恩来が毛沢東の確認を済ませてからその申し出を受ける事を了解した．

６９年５月，ＥＣＡＦＥが東シナ海に石油埋蔵の可能性を公表した．８月１０日愛知外相（第２次佐藤内閣）は，参院で台湾政府が尖閣諸島を含む海域の石油採掘権を米国企業に与えたことへ抗議したと明らかにした．同じ頃周恩来首相は，第９期２中全会で陳毅外相を激しく批判していた（前述）．周恩来の口を借りれば，陳毅外相は，邪で，「劉少奇・鄧小平の類の反毛・反党分子」なのであった．

毛沢東は次に準備する林彪攻撃のために，周恩来，康生，李徳生の３人に，林彪打倒理由のアラ探しを命じた（前述）．なお，その実働部隊に，江青，張春橋，姚文元，紀登奎の４人からなる「中央組織宣伝組」を選出した．それ以後，「中央組織宣伝組」は，あたかも「党中央」（すなわち毛沢東）の如くに勝手に振る舞った．

７０年９月２日，台湾『中国時報』記者が尖閣諸島に上陸し，青天白日旗（中華民国旗）を掲げ，蒋介石総統万歳という文字を書き残した．１０月２８日，米国務省中国部長シュースミスと，台湾政府外交部北米司長銭復が会談し，「尖閣諸島帰属問題」の処理に，両者の見解のすり合わせを試みた．

北京外交部が第１次「尖閣領有声明」を陳毅外相名で発表したのは，７０年１２月１４日であった（当時の日本政府側は，佐藤内閣福田赳夫外相，田中角栄幹事長）．後から歴史を検証して分かるが，この時陳毅外相は拘禁状態に置かれていた．７０年１２月北京政局の焦点は，李雪峰，鄭維山が反毛か否か？の「隔離審査」にあった．

それでは，誰が，脳死状態の北京外交部の名前を騙り「外交部声明」を発表したかという問題が浮上する．客観的に，林彪の「軍事委員会弁事組」以外にはそれは考えられない（前述）．そして「現代の孔子」とみなす周恩来の失脚を，彼等林彪一派は狙っていた．林彪派のその独善工作を転覆させるために，毛沢東が更に別にもう一つ設立した狙撃機関が，江青・張春橋が率いる「中央組織宣伝組」であったと見なせる．

８．第２次外交部声明

１９７１年３月に中国卓球団が名古屋へ来日し，４月２３日王暁雲副団長は大平正芳（前通産相）と東京の料亭で密かに会った．王副団長が大平にその席で，米国卓球選手を北京に招待したいという話を切り出した．

７１年６月７日，「沖縄返還協定」調印日（６月１７日）が１０日後に迫っていたけれども，キッシンジャー米大統領補佐官は，ホワイトハウスで，アレクシス・ジョンソン国務次官から「尖閣諸島の帰属問題」について，アメリカ政府の見解に関するブリーフィングを受けた．キッシンジャー補佐官は同問題の本質をたちまち理解し，「沖縄返還協定」の「事前」に，台湾政府に米側の立場を事前通告しておく必要を認めた．

６月９日，ケネディー米駐台大使は，蒋経国・台湾副総統と面会し，「日本が米政府に施政権を移譲させた島々を，尖閣諸島を沖縄諸島の一部に含めてそのまま，米国政府は日本政府に返還する」と通告した(7)．蒋経国から異論は出なかった．ちなみに６月１０日の『蒋介石日記』に，蒋介石総統はその折衝の事実をしっかり書き残している．

７１月７月９日，キッシンジャー米大統領補佐官は，イスラマバード経由ルートで隠密りに北京に１回目に到着した（２回目は１０月）．その時キッシンジャーはその心中で，毛沢東は今後の「ニクソン訪中構想」に（それが中国の招請か米国の提案か形式は兎も角）よもやヒジ鉄を食わせはしまい，と自信を深めていた．なぜなら，それなしには中国が今抱えている外政問題は解決出来ないと合理的に考えられるからである(8)．その判断は果して適中した．７２年１２月，中国はクリスマスの（対ベトナム）北爆を口頭で非難しつつ，レ・ドクト・北ベトナム代表と米国のパリ和平合意まで仲介役を務めた．

７１年１０月２５日，台湾政府が国連安保理常任理事国としての地位を失った．

７１年１２月３０日，中国外交部はもう一度追加的に第２次「尖閣領有声明」を発表した（日本政府は福田赳夫外相）．ちなみに姫鵬飛外交部長（外相相当）の就任は７２年初からである．一方で林彪は既に失脚している．だからその事情を勘案すると，同声明の発表主体は，江青・張春橋率いる「中央組織宣伝組」だっただろうと割り出せるのである．時に，名目首相としての周恩来は，江青，康生から生命を狙われていた．

毛沢東はニクソン訪中を前にして，肺炎を拗らせて瀕死の状態に陥っていた(9)．毛・ニクソン会談後に，毛は，周・葉打倒政治闘争の本格準備を政治局に対して命じた(10)．

ところで，佐藤栄作第３次内閣は，その悲願とする「沖縄返還」を成就させる為に，「人事の佐藤」の才覚を鮮やかに見せて，難航する繊維交渉の打開用に，切り札として田中角栄を通産相に抜擢していた．

７２年２月２１日，訪中したニクソン米大統領は，よしんば米軍がベトナムから撤兵しても，その後もアメリカがアジアで依然として揺るぎ無い地位を占めている状態をアメリカは欲すると毛沢東に率直に述べた(11)．ニクソンは，その環境こそ中ソ国境に今展開する１００万人を越えるソ連兵を牽制できる策なのであると毛主席が理解すべきだと毛に諭した．

７２年，田中角栄内閣が７月７日に誕生し大平正芳外相とのコンビが生まれた．７月２８日「竹入（義勝・公明党委員長）・周会談」がもたれたが，周恩来は，「尖閣は触れる必要はない．私は関心がない．この問題を重く見る必要はない」，と韜晦的に独白した(12)．

これに先んじて，田中角栄・自民党幹事長は，７０年１２月の中国政府の第１次「尖閣

領有声明」の時点から既に，「尖閣問題」を日中国交回復交渉から積み残してはならない，さもなくば中国とも，「北方領土」，「竹島」同様の拗れた国境係争を後世に積み残す事になろうと自覚していた．

そしてこの国家問題を解決するのは，自分しかいないのだとも田中角栄は決意した．訪中に先立って田中首相は，吉田茂，鳩山一郎，池田勇人らへの墓参りをすませ，また病床の石橋湛山を見舞い，佐藤前首相にも挨拶をすませた．

７２年９月，首相になった２ヶ月後，田中角栄首相は，大平正芳外相，二階堂官房長官等を引き連れて北京に飛んだ．同月，もう一方では椎名悦三郎自民党副総裁を台湾に，説明に向かわせている．

ニクソン米大統領が，（１）アメリカ政府が沖縄諸島と尖閣諸島の「施政権」が「一体」であり，尖閣諸島は沖縄諸島の一部であると見なし，（２）その「施政権」を日本に返還した，というアメリカ政府の「公式見解」を毛沢東に既に７２年２月に北京で直接伝えた事を，キッシンジャー補佐官から詳細に事前説明を受け，それを９月１日の田中・ニクソン「ハワイ会談」でニクソン米大統領から直接確認することが出来た田中首相は，日本国総理として戦後の北京に初めて乗り込んだ．

田中首相は，宿舎の釣魚台１８楼に盗聴マイクが隠されてないかと警戒して，大平外相とこれからの交渉に関する一切の言葉を交わさなかった．

だが，田中首相は，毛沢東と周恩来の両人が揃っている席で，しかも公式通訳（王効賢）にその交渉内容を一言一句記録させた上，必ず「尖閣問題」を切り出そうと，予め心に秘めていた．機を見て話題を切り出す役が田中首相の担当で，日本側の同問題に関わる国際法理解釈を説明する役が，田中より８才年上の「大学出の」大平外相である役割分担も，事前に２人は取り決めていた．

「添了麻烦」という表現が，たまたま家の前を通りかかった女性のスカートに打ち水をひっかけてしまった時に詫びる言葉かどうかで，日中双方は，中国語訳文が書かれている，日本側が予め中国側事務局に手渡しておいた田中首相の挨拶文の訳文の適否で揉めた．周恩来首相が机上に叩き付けるようなパフォーマンスを公式報道用のムービー・カメラの前で見せて抗議し，初日の会議ははじめから大荒れ模様になった．

９月２７日の晩になると，毛主席からのたっての希望で，日中「第３回首脳会談後の 一急遽設定された毛沢東私邸会談」の場に，毛沢東，周恩来，田中角栄，大平正芳の「４者だけ」（中国人の女性正副通訳２人を除く）の顔ぶれが初めて揃った．この席上田中角栄首相が，なにげない軽い雰囲気で，さも突然思い付いた様に「尖閣問題」を切り出した．周恩来首相は，先の竹入会談の時と同じように，「石油が出なければ，台湾もアメリカも問題にしません」とそっけなく応じた[13]．

それからが，大平外相の独壇場になったのだったが，その発言のタイミングは田中角栄首相が大平に促していた．大平外相は，米政府が「沖縄返還協定」に尖閣諸島も一括して施政権を日本政府に返還した事実を述べ，その事実の前提上に，５２年４月２８日に調印

された「日華（台）条約」を，日中国交回復を機に「自然消滅」させるべきである，と主張した．

ところで９月２５日午後１０時から始めた第１回「大平・姫鵬飛（７２年１月外交副部長から昇格）両外相会談」で，日本側はその主張を，予め中国側外交事務局に説明している．この２７日晩の毛沢東の私邸会談では周恩来首相は，「日華（台）条約」がそもそも「無効であった」とすべきだ，とまたしても激怒して応じた．

１９７２年９月２６日，釣魚台「第２回首脳会談」（田中角栄・周恩来）の際に，高島益郎・日本外務省条約局長が、中国側の「日華（台）条約」の「無効化」要求は，同条約が日本の国会の批准議決を通った条約なので，呑めない（承諾できない）と突っぱねて反駁したのに対し，周恩来首相は，「（あなたがたは）法匪（法をずる賢く利用する人）だ」と詰（なじ）って激怒したが，周恩来は翌２７日晩，毛沢東私邸での急遽の会談で毛主席から諌（いさ）められた．

私邸会談での最終落着点上に，日・中「共同声明」は，今迄の日本国と中華人民共和国（１９４９年１０月１日建国）の関係は，「不正常な状態だった」と定義する一方，サンフランシスコ条約第２６条に則って締結され，日本国会の批准を経た「日華（台）条約」については直接触れずに，「復交３原則」の第３原則を踏まえて，国交が正常化した後で，それを「破棄する」と宣言することで，日中双方が歩み寄って決着した[14]．

９月２８日の「田中・周会談」で，台湾と日本の民間貿易交流を中国側は事実上認め，その旨を公表することを許した．中国の最高指導者である毛沢東がその件を了承してこそ，中国政府がそれを決断出来たことは明らかだった．

７２年９月２９日，北京の現在地から大平外相が記者発表した「日中共同声明」（同日午後田中首相一行は上海へ向かう）は，「日華条約は自然消滅した」と発表された．これには５つの法的な意味が持たせてある．

（１）沖縄諸島と尖閣諸島の「施政権」が「一体」である事を日中両国が確認する．
（２）尖閣諸島の「施政権」が日本側にある状態を日中両国が確認する．ただし「主権」がどちらにあるかは確認未定である．ただし，「主権」の定義も国際法は未確定である．
（３）「日華条約」は，「日中共同声明」及び「日中友好条約」の締結によって，「破棄」されることによって「自然消滅」する．
（４）中華人民共和国が中国の唯一の合法政府であり，台湾は中国の不可分の一部である，と中華人民共和国政府が主張することを，日本は確認し尊重する．
（５）日本に対する戦争賠償の請求権を中華人民共和国政府は放棄する．

＊（４）項の問題について，中国と国交を回復した他国の例と比較する．フランスはまったく触れていない．カナダは take note（留意する）とし，イギリスは acknowledge

（認知する），としている[15]．９月２９日，法眼外務次官は彭駐日台湾大使に，日「台」関係は今後，「実務関係」として継続されることを通知した．

＊「共同声明」第１項は，いままでの日中関係は「不正常」だったと述べ，第４項では，１９７２年９月２９日をもって日中両国は外交関係を樹立する，とのみの文言を記す．日本側で法務関係の随員は，高島，吉田，栗山，橋本．

９．毛沢東・周恩来の２人の最晩年の人間関係への評価

第２次世界大戦前の周恩来は，国共合作工作の中心的影役者でその名を知られただけに，「国民党のスパイ」の濡れ衣のレッテルを何度も，党内の同志からさえ貼られて攻撃されていた．特定の強力な軍事基盤を持たない文人肌の「弱み」が周恩来の性格に顕著であった[16]．だが，コミンテルンの受けは，周恩来は秦邦憲，張聞天と所謂「上海ビューロー」を形成し，瑞金中華ソビエト主席であった毛沢東より党序列上位で，中国共産党のトップ層のバランサーとして，周恩来の存在感は傑出していた．

周恩来の革命経歴は中国共産党の最初の武装蜂起であった「南昌蜂起」（２８年８月）の首謀者から始まる．また周は，中国共産党最初の上海大規模都市ゲリラ・スト暴動運動（李立三体制下の３０年６月政治局決議に基づく）の実動部隊の中心指導者でもあった．

周恩来首相は９月２８日夜，田中角栄首相に，孔子の『論語』子路篇由来の「言葉」（「言必信，行必果」）を贈った．その句には，「考えが浅薄で融通が利かない人」という後半の句が隠されていた．そんな外交上のリスクを負ってまで周恩来はわざわざ誰を貶めようとしていたのか？

毛沢東の方はその前日の２７日夜，私邸で田中角栄と会見し別れる際に，愛読する「楚辞集注」を田中に贈った．亡国を嘆く詩人・屈源の悲哀詩集である．

林彪亡き後に，毛沢東は，自分が死亡すればすぐにも「現代の孔子」（周恩来）が「第２の劉少奇」になり，「第２のスターリン（毛沢東）批判」を開始するに違いないと想像したから，「批孔政治闘争」に徹底執着していた．

しかし，「現代の孔子」を必ず潰しておくには，その役目を，誰を信頼して託せば良かったのだろうか？最初に毛がこれぞと後継者に見込んだハニカミ屋の林彪は，ところが虎にも豹にも化け，毛沢東の「党高，軍低」精神をいとも簡単に裏切った．

後継者として江青・張春橋では力不足が明らかだったし，そこで毛沢東は鄧小平を７３年３月に副総理に復活させて，７５年１月には第１副総理に抜擢したのであった[17]（その前に，鄧は解放総参謀長，中央軍事委副主席にも任）．

鄧小平は，７２年に江西省・南昌労働キャンプ拘禁処分から復活した．その後，７５年に鄧小平は，思想審査として毛沢東の面前で，まるで科挙の殿試を彷彿させる最終口頭試験に臨んだ．その折りに鄧小平は，そこがいかにも鄧らしいがいけしゃあしゃあと，こう述べたそうである．「私は文革の間，桃源郷（シャングリラ，この世の楽園）にいさせて

もらったので，文革のことはまったくよく分かりません」．

１０．小結 ― 大平正芳の不思議な、隠された経歴とそのブレーンたち

大平正芳は賀屋興宣に仕えた事を誇りに語ったが，大平が外相になった時，大蔵省出身の直近の先輩外相は愛知揆一であった．大平は池田勇人蔵相秘書官として池田に見出された人物である．大平はそのポストをきっかけとして，７０年に池田内閣官房長官，外相時代に「日韓国交正常化」への地均しを行い，佐藤内閣では通産相を経験した．自民党は閥では宏池会第３代会長に就任している．

大平正芳は１９３６年東京商科大学（現・一ツ橋大学）卒業で，大蔵省に入省し，その後官僚から政治家に転身した．

田中角栄は首相として自分が組閣するのに当たり，「一内閣一仕事」に，「日中国交正常化」をその一仕事に当てて想定していた．ついては田中は，大平正芳を「相棒」の外相に抜擢したいとも決意を固めていた．中国事情と中国人脈に精通する大平と組まなければ日中国交正常化は実現できない，とまで大平は田中角栄を魅了していたのであった．

愛知揆一は青木一男が「大東亜相」だった頃に，同省総務局経済課長として「統制経済」の元締めを担当していた．愛知の経歴はそれ以前に，興亜院華北連絡部財務局財政課長であった．その下で大平が，中国金融のエキスパートとして育った．

若き大平正芳は，この頃大蔵省から派遣され，興亜院張家口連絡部に配属されていた．愛知と大平の強い絆は，この頃以来作られたのであった．愛知や大平が携わっていた当時の任務は，まずは上海為替市場での儲備券・連銀券・日銀券パー関係の安定を維持する事であっただろう．次には，その儲備券の発行元である汪兆銘・南京純正政府（４０年３月樹立）の金融圏を北向きに拡大させ，ひいては華北地域一帯も包んだ連結金融体制を形成させる様に，汪兆銘南京純正政権が推進する金融工作をサポートすることになろう[18]．

要するに，汪政府が流通させる儲備券を支援し，重慶蒋介石政府が発行する旧法幣を駆逐させることを興亜院は目標にしたが，しかし今日から歴史を検証すると，このシノプシスには大きな矛盾がある．皮肉にも，そもそもその敵通貨たる「旧法幣」は，英大蔵省リース・ロス卿の手助けを仰ぎながら，汪兆銘が中国にそれを創り出した当人だったから．

この旧「法幣」という強力な金融武器の威力があったからこそ，重慶政府が抗日戦を最後まで戦い抜けたのだったといって過言ではない．汪兆銘は政治的に敗北したけれども，数々の決定的なその政治決断，と（関税改正及び通貨統一に見る）抜本的諸経済政策は，近代中国が自立へ向かう歴史の道程に，確然たる偉業を刻んで残している．ちなみに，この旧法幣は，１９４９年１０月以後は，中華人民共和国「人民元」に顔を改められている．

汪兆銘は，４３年１月９日に，中国正統政府（南京純正政府）の名をもって，満を持して対英米宣戦を発布した．

愛知揆一はたまたま周囲に優秀なブレーンに恵まれていた．青木一男がまだ存命だったが，青木は４０年４月から阿部信行特命全権大使に伴い，南京純正政府財政顧問を１年９ヶ月間務めた．また大橋忠一も存命中であった．大橋はかつて「日・満経済委員会」満州国代表であった．

大平正芳が，愛知揆一を介してそれらの先人が有する日中双方の経済・金融人脈に通じていた事情を，我々は推察することが出来る．

田中角栄首相は，毛沢東との直接遭遇の千載一遇のタイミングが近付いていることを，また陳毅外相失踪事件も，大平正芳の機密情報と分析力から探知していたのだろう．

注

（１）『八全大会文献集』第２巻，３２０頁．

（２）Alexander L George, “The Chinese Communist Army in Action : The Korean War and its Aftermath” Columbia, 1967.

（３）１９６７年７月３１日『人民日報』

（４）１９６６年４月１８日『解放軍法』

（５）『中国文化大革命事典』中国書店，１９９７年，２１８頁．

（６）姫田光義『林彪春秋』中央大学出版部，２００９年，２８１頁．毛沢東はこの旅に華国鋒を随行させていた．華国鋒は７６年２月に総理代行に任．華国鋒は個人的に自分が毛沢東から貰いうけたとする，「君が（私の後を）やれば私は安心だ」と書いてある遺書ともつかぬ書き付けを振りかざして，７６年１０月党主席，中央軍事委主席に任じた．８１年６月失脚したが，中央委員としては残留．

（７）塩田純『尖閣諸島と日中外交』講談社，２０１７年，１１８頁．

（８）『キッシンジャー回想録　中国（上）』岩波書店，２０１２年，６０頁．

（９）『尖閣諸島と日中外交』前掲書，１１１頁．

（１０）高文謙『周恩来秘録』文芸春秋，２００７年，１７２頁．

（１１）『キッシンジャー回想録　中国（上）』前掲書，２８７頁．

（１２）『尖閣諸島と日中外交』前掲書，１５８頁．

（１３）同書，１９３頁．姫鵬飛（外相），廖承志（中日友好協会会長）も退席させた．

（１４）『大平正芳全著作集』第４巻，講談社，２０１１年，１１２頁．

（１５）新潟日報編『日中国交正常化』２０１２年，１３２頁，１１８頁．

（１６）『林彪春秋』前掲書，２８０頁．

（１７）『毛沢東秘録（下）』産経新聞社，１９９９年，２７２頁．

（１８）判澤純太『日中戦争の金融と軍事』信山社、２００８年が，（旧）法幣と儲備券（新法幣）の為替戦争が，日中戦争の核心的系争点にあったことを検証している．本書はまた，日米戦争は，上海為替市場での英ポンド＝旧法幣為替崩落（３次）と，日本円（後に儲備券も加わる）・ピアストル仏印貨の相克（勢力

争い）が本質にあった，との見解も提示している．

[尖閣諸島海域をめぐる日中間の歴史関係]

(a) １９７４年，周恩来首相は葉剣英・中央軍事委員会副主席に空母の建造を指示した．

(b) １９８９年，全人代常務委員会に中国海軍が空母建造案を提出し，採択された．

(c) １９９２年9月１１日，日本政府（野田民主党政権）が尖閣諸島を，日本人の民間人から２０億 ５，０００万円で，国有地にする目的で購入したと推定される．

(d) １９９２年中国政府は尖閣諸島（釣魚諸島）を自国領土だと明記した（国内）「領海法」を一方的に制定した．それは（c）項への対抗措置であった．

(e) １９９３年劉華清が中国中央軍事委員会副主席に就任した．劉華清は「中国近代海軍の父」と呼ばれる．

(f) ２００９年北京訪問中の米海軍トップの，ゲイリー・ラフェット作戦部長が，２０２０年までに中国海軍は空母と艦載機の「空海一体運用兵力」及び遠洋航海能力を，南シナ海と東シナ海で一定の高度レベルで備えるであろうとコメントした．

(g) ２０１２年，習近平体制が中国に誕生した．

(h) ２０１８年3月１４日，トランプ米大統領がティラーソン国務長官を解任した．ティラーソン長官は中国政府に対してそれまでに，南シナ海，東シナ海における領土・領海問題は，国際法と正義に基づいて解決するべきであると外交的に持ちかけていたが，中国政府側はその問題は飽く迄，当該領土・領海紛争を抱える，当事者２国間で解決すべきものであると反駁した．

時恰も，オランダ・ハーグの国際海洋司法裁判所で，フィリピン国がかねて提訴していた南沙諸島領有紛争訴件に関して，中国の主張にまったく根拠が認められないとの審判が下ったが，中国政府はその立場を，国際海洋法を必ずしも優先せず，２国間で決着する「歴史問題」，「政治問題」として扱うべきだと主張した．

感謝：

本年は田中角栄生誕百年に当たるし，日中国交回復４５周年でもある．日中国交回復以来日中両国が築いてきた関係は日中双方の利益に適い，両国の成長発展に寄与し，今や確実に世界政治経済を支える重要な基軸の一つになっている．その大扉を日本側から開いたのが，田中角栄首相であった．

田中角栄首相の政治的性格（political sympathy）を確かめようとして，生まれが西日本人であるが私は，４分の１世紀「新潟３区」に移り住んで，かつて若き田中角栄が見て育った同じ山，川，峠，岬を見，その地域社会の暮らしを経験して見る．地方には独特な季節折々の暮らしを生きる人々がおり，その暮らしぶりに「気構え」，「気骨」がある．我が師（信州松本市出身の，松本深志魂の塊の様な三輪公忠教授）はそれを注目して，それの特徴を「地方主義」（ちほうしゅぎ）と名付ける．

その新潟・柏崎での実体験がもし私に無かったならば，私は田中角栄と毛沢東の出会いを描こうとしても，自信を持てなかっただろう．

その田中首相・大平外相との面会時に，毛沢東は，一方では周恩来を相手に，終生の敵（かたき）と見据える周と人生最後の政治闘争が起きる予感がしていた．田中訪中の裏事情はたいへん複雑だったのである．７２年９月２７日，周恩来との釣魚台第３回首脳会談が終った後を見計らって，毛沢東は自分の別邸に田中と大平を招いた．

毛沢東は田中首相と大平外相に向き合って，極東・東アジアの安全保障上の観点からして，「日米安全保障体制」は中国に有効に作用する，との自分の見解を明かした．

更に毛は田中に，「日本軍（田中角栄に出征経験（盛岡騎兵隊）があったことを毛は予め知って当てこすっている．ただし，田中は一兵卒だった）が国民党軍を叩き潰してくれたお陰で，中国共産党が今日の中国の天下を取れたんですよ」と上機嫌に話しかけもしたそうである．

いかに相手が，自分が招いた賓客であろうと，毛沢東は初対面の外国人になぜ，この様に特別に気を許して心中を吐露したのであろうか？

当時中国はアメリカとの提携無しでは，ソ連の脅威にもう立ち向えなくなっていた．さりとて毛は，ニクソンのアメリカ一国だけを相手にするには不安だったろう．客観情勢を分析すると，超大国アメリカの行動を規制することはもとより困難だが，アメリカに自制を求めさせることは出来ると考えられた．そのためには第２の有力なパートナーが中国に必要になった．かくして毛沢東は，田中角栄の政治実力を鑑定しようと思い立ったのであろう．

中国人・毛沢東は，日本人・田中角栄首相との一期一会の出会いに，それが初対面でしかも相手が外国人だったのにもかかわらず，その心の奥底に秘めている，同胞の中国人相手では決して見せない信頼感を寄せた．正にマジックである．そしてその面会から歴史的に，新しい日中両国関係の交流の「基点」が，今日まで形成されている．田中角栄が，毛沢東の交渉パートナーとして，人格的魅力をみせて，当時ギリギリ間に合って毛沢東の前に現れたということなのであろう．相手に「オメサ」（おまえ様の尊称）と呼びかける，「越後の自由人」はもし用事があれば愛敬たっぷりになるが，用が別段無ければひたすら不器用無愛想に寡黙である．あまりに素朴に分かりやすいのだが，何百年も雪の下の根気強い暮らしを積み重ねてきて出来上がった気骨だとしかいうほかないだろう．

毛沢東は田中に，もし自分が日本語が話せたらなら多分こういいたかったのだろう．「私もあなたも山ダシですネ」と．中国語でならこういう．「我们俩人都是山坡人、是吧」．